

『正法眼蔵』「観音」近世末書の注釈態度

——『弁註』と『聞解』の比較——

岩 永 正 晴

一、はじめに

近世に成立した『正法眼蔵』末書の研究を志し、目下基礎的な調査に取り組んでおり、本稿はその一環をなす。筆者の問題意識については、拙稿「面山撰「議永平排遣楞嚴円覚弁」と道元禅師」をご参照頂きたい¹⁾。

本稿では、江戸時代に成立した『正法眼蔵』の注釈書の内、天桂伝尊（一六四八〜一七三五）撰『正法眼蔵弁註』（以下『弁註』と略す）と、斧山玄鈿（?〜一七八九）述『正法眼蔵聞解』（以下『聞解』と略す）を取り上げ、『正法眼蔵「観音」（以下単に「観音」と表記する）に対する両者の注を比較する²⁾。

まず本稿で扱う『弁註』と『聞解』の概略を記す。

中世に成立した『正法眼蔵聞書抄』及び義雲禅師の所謂『頌著』以降近世に至る迄の間に、『正法眼蔵』全体に対する

注釈書の成立は知られていない。その事情については、現在のところ測りがたいが、天桂の『弁註』が、近世洞門による『眼蔵』注釈書の嚆矢となる。

《近世成立の主な『正法眼蔵』末書》

『正法眼蔵僭評』（享保一〇〇〜一七二五）頃撰

無著道忠（一六五三〜一七四四）撰

『正法眼蔵弁註』（享保一六〇〜一七三二）撰

天桂伝尊（一六四八〜一七三五）撰

『正法眼蔵却退一字参』（明和七〇〜一七七〇）撰

瞎道本光（一七一〇〜一七七三）撰

『正法眼蔵聞解』（安永四〜五年〜一七七五〜六）述

斧山玄鈿（?〜一七八九）述

『正法眼蔵私記』（安永九〜天明五〜一七八〇〜五）撰

雑華蔵海（一七三〇〜一七八八）撰

『正法眼蔵那一宝』（寛政三〜一七九一）撰

父幼老卵（一七二四〜一八〇五）撰

『眼蔵』を論拠として起こった所謂宗統復古運動は、俄に『眼蔵』への関心を呼び起こし、元禄一六年（一七〇三）に一応の政治的結着がつく。『弁註』が成立した享保一六年（一七三一）はその直後と言え、『眼蔵』の真偽も定かならぬ時期であったと思われる。³したがって天桂は、『眼蔵』本文の削除という、今にすればいぶん思い切ったことも含め、『眼蔵』の本文を確定するという仕事から始めねばならなかった。⁴

『弁註』を始めとする天桂の業績は、西有穆山師による顕彰⁵、鏡島元隆博士による再評価⁶を受け、現在でこそ志部憲一氏などにより詳細な研究が進められているが、⁷それ以前には、博覧強記で知られた天桂の『眼蔵』研究として知悉されていながら、周知の通り「天桂地獄」などと言われ、天桂派下以外では、さほど重んじられなかったと思しい。

一方の『聞解』は、洞門きつての碩学と謳われる面山瑞方（二六八三〜一七六九）の孫弟子たる斧山玄鋏の提唱を筆記したものであり、その成立は『弁註』より五十年程下った安永四〜五年（一七七五〜六）頃と見られる。このころには『眼蔵』の真偽に対する議論も落ち着き、瞎道本光（一七一〇〜一七七三）の『正法眼蔵却退一字参』所謂『参註』も未刊行とは言え完成し、面山等による道元禅師研究も長足の進歩

を遂げている。

この『聞解』は、昭和に入ってから岸沢惟安師によって斧山の提唱の記録であることが明らかにされる迄、⁸面山の提唱を斧山が筆記したものと見做され伝承される。現在でも『正法眼蔵』を学ぶ際に使用される会本、『正法眼蔵註解全書』は、『聞解』の科段に従い『眼蔵』本文を区切り、まずはじめに『聞解』の注をあげていることは周知のところ、これは、『眼蔵』参究にはまず『聞解』から入る、という宗門の口訣に基く、という。⁹これにはおそらく面山の権威を帯びていたという経緯も反映していよう。また、一方では『眼蔵』入門書と見做された訳で、注釈書としては比較的レベルが低いという評価も伴う。¹⁰

結局のところ本稿で扱う二書は、かたや宗門の異端という評価を受け、かたや初歩的入門的ながら正統な注という評価を受けてきた、実に対照的な書物ということになる。

二、所引典籍から見る『弁註』の『聞解』への影響

博引旁証で知られる天桂は、「観音」の巻に注を施すに当たっても、広い範囲の典籍を引用する。書誌的な検討をまたねばならないが、その成果は後に成立する末書にも参照され利用されており、『聞解』もその例に漏れてはいまい、と筆者は考える。そこでまず、「観音」注釈に際して『聞解』が

『弁註』を参照した可能性について確認する。

改めて述べるまでもなく、『正法眼蔵』「観音」は、大悲菩薩、即ち千手千眼の観音菩薩をめぐる雲巖曇晟と道吾円智との問答、所謂「雲巖大悲菩薩」話を本則とする拈提である。「観音」本文は、この本則を冒頭に掲げたあと、大悲菩薩について次のような説明を加える。

いま道取する大悲菩薩といふは、観世音菩薩なり、観自在菩薩ともいふ。諸仏の父母とも参学す、諸仏よりも未得道なりと学することなかれ。過去正法明如来なり。

この一節に対して『聞解』は、

○観世音菩薩ナリコレカラ観音ノ事相ヲ述ブ。旧訳ニ云観世音菩薩、新訳ニハ云観自在菩薩。○諸仏ノ父母トハ請観音經、我今帰世間慈悲父トアル。釈迦ノ自分ニ慈悲父トオホセラルレバ、仏ノ父母ナルコト明ナリ。又、観音三昧經ニ釈迦ノ正法明如来ノ弟子ニナラレタコトモアリ。ココデ事相ハスム。

と注する。¹²『観音三昧經』は早くに失われ、道元禪師当時において、もはや参照できなかつたであろう。『聞解』が何に依つてこの記述をしたのか確定できないが、管見の及ぶ限り、次の三つの可能性を考へることができる。

ひとつには、天台の典籍『観音玄義』が引く『観音三昧經』の経文を、『聞解』が参照した、という可能性である。

若観音三昧經云、先已成仏号正法明如来、釈迦為彼仏作苦行

弟子。¹³

『聞解』は天台の典籍に通じている如くであり、これに依つたとしても不自然ではない。

次には、『聞解』が『弁註』を参照したという可能性が考えられる。『弁註』は該当の本文に対し、次の如く注を施す。¹⁴

辨曰、此語著眼看。生仏箇々誰是不観音実子。観音三昧經云、観音在我先已成仏号正法明如来、釈迦為彼仏作苦行弟子。又云、我与観音俱時成正覚云云。是も本成密語なり。

『弁註』が何に依つて『観音三昧經』を引いたものか不明である。『観音玄義』には、傍線部②に該当する部分を見出すことはできない。

更には、『聞解』提唱当時には未刊行とは言え、『聞解』が『参註』を参照した可能性もある。『参註』には、

観音三昧經云、此菩薩已成正覚号正法明仏。…略…向所引三昧經云、釈迦為正法明作苦行弟子。

とあり、『聞解』の注をカバーするに足る経文が引かれている。

以上いずれとも確定できないが、『聞解』が『弁註』を参照した可能性も指摘できる、と思う。

なお、「過去正法明如来」の語について、『弁註』は、本来成仏という天桂にとつての重要な思想¹⁶を明かすものだと見ているが、『聞解』は「コレカラ観音ノ事相ヲ述ブ」「ココデ事

相ハスム」というように、単に「観音」の事相を表したに過ぎないと、軽く受け流していることは興味深い。

次に二つ目の例。「観音」本文には、

雲巖道の観音と、余仏道の観音と、道得・道不得なり。余仏道の観音は、ただ十二面なり、雲巖しかあらず。

という一節がある。これに対し『聞解』は、

十一面—十一面観自在菩薩心蜜言念誦儀軌經云、観自在菩薩白仏言、我有心蜜語、名十一面。十一俱胝如来同俱宣説云々。

と施注する。⁽¹⁸⁾『聞解』の指摘通り『十一面観自在菩薩心蜜言念誦儀軌經』には該当する經文を見出し得る。大正蔵本によつて示せば次の如くである。⁽¹⁹⁾

時観自在菩薩与無量持明仙困遶。往詣世尊所。至仏所已。頭面礼足右遶世尊三匝。退坐一面白仏言。世尊。我有心蜜語名十一面。十一俱胝如来同共宣説。我今説之。利益安樂一切有情。能除一切疾病。

一方『弁註』も同じ經を引く。⁽²⁰⁾

弁曰。十二面写誤一之字乎。十一面観自在菩薩心蜜言念誦儀軌經曰。観自在菩薩白仏言、我有心蜜語、名十一面。十一俱胝如来衆、同共宣説云云。俱胝此云百億。

比較すると、圈点を付した文字に相違はみられるが、文の繋ぎ方や切り方からして、『聞解』は『弁註』に依つたとも見ることができ。

次に三つ目の例。雲巖のことは「大悲菩薩用許多手眼」を拈提するに際し特に「許多」について、「観音」本文は、

許多は、いくそばくといふなり。如許多の道なり、種般かぎらず。種般すでにかきらずば、無辺際量にもかぎるべからざるなり。用許多のかず、その宗旨かくのごとく参学すべし。すでに無量無辺の辺量を超越せるなり。

という。⁽²¹⁾この中「無量無辺」という僅かなことばに対して、『聞解』はわざわざ、

無量無辺ノ数ハ華嚴阿僧祇劫品ニ出ツ。

と典拠を示すが、⁽²²⁾それ以上にコメントを付けることはない。

一方『弁註』は、典拠として同じく『華嚴經』を指摘し、その經文までも引いてみせる。⁽²³⁾

弁曰。華嚴阿僧祇劫品中、如来為心王菩薩、明諸数学量曰。阿僧祇阿僧祇為一阿僧祇。阿僧祇阿僧祇為一無量。無量無量為一無量。無量無量無量為一無辺。無辺無辺為一無辺。無辺無辺無辺為一無等。無等無等為一無等。乃至広説仏無辺無等無等トノミ説玉フテ不説其実限量何如。一刹那量亦同。

『弁註』にとつてこの經文は、「無量無辺」と「一刹那量」とが同じであるという、天桂の基本的な思想を表明するため必要となる。この点については、志部憲一氏の論文「天桂伝尊の時間論」に詳しい。⁽²⁴⁾しかし『聞解』にとつては特に必要な注とも思われぬ。『聞解』はこの經文を引く理由を示

しておらず、ただ『弁註』の指摘を利用しただけではないか、という感を免れない。いずれにせよ他の末書は、わざわざこの経文を引きなどしない。

わずか三例ではあるが、以上の具体例から、『聞解』は『弁註』を知っていたのではないか、という推測をしておきたい。さらに言えば、『弁註』の重要な思想に関わる注を、『聞解』は知っていたいながら、内容的には関わりを持つとはしなかったのだ、と思う。

三、『弁註』の観音と『聞解』の観音

次に、『弁註』と『聞解』との、注釈上の相違について述べる。

大悲菩薩つまり一切衆生を救済せんとする誓願によって千手千眼を獲得した観音菩薩の把握が、本則「大悲菩薩」話の主題であり、「観音」本文の関心もここに向けられる。そこで、『弁註』と『聞解』とによる観音理解を比較するという視点を設け、両者の基本的な立場の相違を検討する。

1. 『弁註』の観音

まず、『弁註』の注に示される観音を確認する。典故に関連して既に提示したが、「観音」の本文、

いま道取する大悲菩薩といふは、観世音菩薩なり、観自在菩

薩ともいふ。諸仏の父母とも参学す、諸仏よりも未得道なりと学することなかれ。過去正法明如来なり。⁽²⁵⁾ に対して、『弁註』は、

辨曰、此語著眼看。生仏箇々誰是不観音実子。観音三昧経云、観音在我先已成仏号正法明如来、釈迦為彼仏作苦行弟子。又云、我与観音俱時成正覚云云。是も本成密語なり。と施注⁽²⁶⁾し、衆生も仏も観音の実子であること、観音は釈迦よりも先に成仏しており釈迦の師であったこと、一方で釈迦と観音は同時に成仏したことを述べ、さらにこれらが、本来成仏を明かす密語であると括る。

志部憲一氏は論文「天桂伝尊再考」で、

天桂の生涯を通じて主張された「開仏知見」や「悟」の特色を要約して示せば、まず第一に「転迷開悟」「待悟」ではないという事。第二に仮名としての「悟」である事。第三に「不迷の道理」としての本来成仏である事。以上の三点を考える事ができるであろう。

と述べられる。⁽²⁷⁾これによれば、天桂は大悟と云うことを重視する、その悟りとは迷いに対する相対的な悟りではない、しかし仮に設けられる相対的な悟りによって、相対的な迷悟の根本にある「不迷の道理」という絶対的な悟りに到ることを重視する、この「不迷の道理」とは、一切衆生の本来的な成仏の道理と同じである、ということになろうか。

これをもとに『弁註』の注釈に帰るならば、迷悟の根本に

ある「不迷の道理」としての観音の姿、本来成仏している衆生としての観音の姿を見ることができよう。つまり『弁註』の見た観音とは、天桂にとつての中心的な思想である本来成仏を体現した菩薩ということになる。

2. 『聞解』の観音

『弁註』が「本成の密語」を読みとつた「観音」の本文について、一方の『聞解』が「ココデ事相ハスム」と軽く受け流していたことは既に指摘しておいたから、次に、『聞解』が「観音」に読みとろうとする観音の姿を確認する。

『聞解』の冒頭、いわば表題となる観音の二字を解釈して、次のように述べる。⁽²⁸⁾

○観音―観音ハ三般若ノ中ノ觀照般若ナリ。今日スワル坐蒲団上ヨリ般若ノ知光ヲ放テ、万法ノ無性ナルヲ照シ見ルナリ。須弥上ニアル觀音大士ニアツケルコトデナイ。觀音声、皆得解脱ト云、觀照般若ニ自在ナル菩薩ノコト。天台ニ止觀ト云觀字ト同意ナリ。止ハ不触事、不對縁兀坐ノ事。觀ハ兀兀地ニ非思量底ヲ思量スルナリ。

これによれば観音とは、須弥壇上にましまして諸人の願いを叶える菩薩ではなく、觀照般若であり、道元禅師の坐禅であり、自ら万法の無性を照見する坐禅人のことである、ということにならうか。そしてその坐禅は、天台の止觀、宏智の

「坐禅箴」、「薬山非思量」話によつて説明される。

観音とは三般若の中の觀照般若である、という言い方は、例えば『法華玄義』五下に見られる。⁽²⁹⁾

眞性は實相般若、觀照是觀照般若、資成是文字般若。具如上釋境智行三妙之相。故下文云、止止不須說、我法妙難思。又云、是法不可示、言辭相寂滅。即實相般若。我及十方佛、乃能知是相。唯佛與佛乃能究盡。又云、我所得智慧微妙最第一。即觀照般若。又云、我常知衆生、行道不行道、隨應所可度、爲說種種法。若干言辭、隨宜方便。即是文字般若。

不案内のため十分な理解ができていないが、結局実相を照らし見る般若が觀照般若ということであろう。『聞解』は『法華経』「普門品」の經文を踏まえながら、⁽³⁰⁾「觀音声、皆得解脱ト云、觀照般若ニ自在ナル菩薩ノコト」とも述べているから、あらゆる音声に実相を見て取ることが、觀照般若としての観音である、というのであろう。

また、「今日スワル坐蒲団上ヨリ般若ノ知光ヲ放テ、万法ノ無性ナルヲ照シ見ルナリ」とも述べており、それはあくまで坐蒲団上の風光、つまり坐禅の上のことと限定している。

さらに『聞解』は、この坐禅としての観音の「觀」の字は、天台の止觀の「觀」と同じである、とも言う。これについては例えば『摩訶止觀』一上の所謂「円頓章」に、

圓頓者、初縁實相。造境即中、無不眞實。繫縁法界、一念法

界、一色一香、無非中道。己界及佛界、衆生界亦然。陰入皆如、無苦可捨。無明塵勞、即是菩提、無集可斷。邊邪皆中正、無道可修。生死即涅槃、無滅可證。無苦無集、故無世間。無道無滅、故無出世間。純一實相、外更無別法。法性寂然名止、寂而常照名觀。雖言初後、無二無別、是名圓頓止觀。

とある。⁽³¹⁾初めより実相を観ずる円頓止観では、心仏衆生のすべてが実相であり、その法性の寂然たることが「止」であり、寂然として常に実相を照らすのが「観」である、という程に理解しておく。

この「止」について『聞解』は、

佛佛要機、祖祖機要。不觸事而知、不對縁而照。不觸事而知、其知自微。不對縁而照、其照自妙。其知自微、曾無分別之思。其照自妙、曾無毫忽之兆。曾無分別之思、其知無偶而奇。曾無毫忽之兆、其照無取而了。水清徹底兮魚行遲遲、空闊莫涯兮鳥飛杳杳。

という宏智の「坐禅箴」⁽³²⁾を踏まえて「不触事・不對縁」が「止」であると説明している。とすれば、ここでは述べられないが、「坐禅箴」によって止観の「観」を説明するならば、「不触事而知」の「知」、「不對縁而照」の「照」が「観」に当たる、ということになろう。

『聞解』は「観ハ兀兀地ニ非思量底ヲ思量スルナリ」とも述べている。これは言うまでもなく「薬山非思量」の話を、

ひいては道元禅師の『正法眼蔵』「坐禅箴」や『普勧坐禅儀』などを踏まえている訳で、非思量とは実相のことだという理解解を読みとることができる、と思う。
筆者の理解を図示すれば次の通りになる。

		止	観
「摩訶止観」	法性寂然名止		寂而常照名観
宏智「坐禅箴」	不触事・不對縁		知・照
薬山「非思量」話	兀兀地		非思量底ヲ思量ス

つまり『聞解』は、「観音」における観音が道元禅師の坐禅人の姿であると押さえ、その坐禅を天台の止観と宏智の黙照禅とに重ね合わせて説明している、と理解したい。

このような見立てが可能であれば、『法華経』及びその解釈学としての天台教学、さらには宋朝の特に宏智の禅に、道元禅師の思想の源流を求める現在の学会の動向に照らしても興味深いものがある。

ところで、観音とは観照般若であるという点は、師匠筋にあたる面山瑞方の『述讚』に由来することは確認できる。⁽³³⁾また、坐禅に依る行取を重視した面山の法孫である⁽³⁴⁾ことを思えば、斧山は観音を坐禅と押さえることは納得できるが、道元禅師の坐禅に天台の止観及び宏智の坐禅とを重ね合わせると

いう見立てがどこに由来するのか興味深いところで、その探索は今後の課題としておきたい。

四、まとめ

上来『正法眼蔵』「観音」注釈を通して『弁註』と『聞解』がそれぞれに提示する観音像を考察してきた。いずれにせよ、観音を救済者として仰ぐのではなく、修行者自身の姿として捉えていこうとする姿勢は共通する。従来この姿勢は道元禅師に特異なものとして語られてきたこともあるようだが、⁽³⁵⁾ 実には教家と禅門のいづれからも導き出せるものであろう。よつて、両注が那邊に道元禅師の独自性を見出ししているか、ということに問題は絞られる。

簡単に言えば、『弁註』は、道元禅師の観音を、いわゆる悟りによって明らかに知られる「不迷の道理」「本来成仏」という、天桂自らが体得した中心思想を体現したものとして捉えようとしており、一方の『聞解』は、道元禅師の観音を、観照般若としての坐禅の姿であると捉えようとしてた。極論すれば、『弁註』は道元禅師の観音に天桂自身が得たものと同等の悟りを見、『聞解』は道元禅師の観音に、その中心的な教えとしての坐禅を見ようとした、⁽³⁶⁾ と言えはすまいか。

天桂による『正法眼蔵』概論ともいうべき、『正法眼蔵弁

註調絃』において道元禅師・義雲禅師以来の知識たるの自負を吐露してゐる天桂は、⁽³⁶⁾ 「観音」の巻注釈にあたっても自らの悟りに則り、道元禅師と同じ高みに立って注釈を下す。一方の『聞解』は、「永平の面を見て他の面を見ざれ」との姿勢を貫いた面山の教学を受け、道元禅師の教えを高く仰ぎ、その教えを天台の典籍や宏智の「坐禅箴」などを踏まえながら理解説明していこうとしている。とすれば、結句両者の違いは、派祖道元禅師に対する態度の相違に由来するのではあるまいか。今後継続して検討する所存である。

注記

(1) 拙稿「面山撰「議永平排遣楞嚴円覚弁」と道元禅師」(『宗学研究』四〇号所収)において、筆者の問題意識について、以下のように述べておいた。

「道元禅師(一一〇〇)〜一二五三」の名著『正法眼蔵』参究に際して、近世の末書が齎す有効性・影響力はいまなお大きい。しかし、各末書の立場を把握していなければ、その成果を十全に活用することはできない。」このような問題意識から、筆者は各末書の研究を志し、次の二方法を設定することとした。ひとつには、鏡島元隆博士が禅師の著作研究において行われた出典研究を、その末書研究にも用いること。即ち各末書における引用典籍の検出である。ふたつには、禅師の特徴的な主張に対する近世における反応を確認すること、である。これらの作業を通して、各釈主の教学的背景及び当時の思想状況を探り、ひいては道元

禪師との距離を測定していきたい。

- (2) 検討に際し、『弁註』は『永平正法眼蔵菟書大成』（以下『大成』と略記す）一五所収龍水手書本影印、『聞解』は同一七所収吉蔵寺本影印を用いた。

なお、『弁註』については、河村孝道氏小坂機融氏により天桂直筆の草稿本が翻刻紹介されつつあり（『駒澤大学仏教学部研究紀要』第五六号所収「天桂伝尊直筆艸稿」「正法眼蔵辨注」の翻刻（一））参照）、今後の検討においては当然視野に入れられねばならない。

- (3) 無著道忠がその著『永平正法眼蔵僭評』において、洞門の宗匠が偏に道元禪師の著述に依ろうとする風潮の中で、梅峯竺信（一六三三〜一七〇七）の『林丘客話』、石雲融仙（一六七七〜？）の『叢林葉樹』などを援用し、「予亦嘗竊閱彼書、所信唯重雲堂式記耳。嗚呼、又何世無偽書歟」と述べ（『大成』二〇、四〇二頁上）、『正法眼蔵』の偽撰を示唆していることは周知の所であり、『正法眼蔵』を取りまく当時の雰囲気的一面を知ることが出来る。

- (4) 志部憲一氏論文「天桂伝尊の『正法眼蔵』研究―研究初期段階を中心として―」（『曹洞宗宗学研究所紀要』四所収）参照。

- (5) 西有穆山師による『弁註』の評価については、志部憲一氏論文「天桂宗学考―『現成公案・弁註』における『御抄』批判とその背景」（『曹洞宗研究員研究紀要』第一九号）に詳しい。

- (6) 鏡島元隆氏論文「天桂伝尊の思想」（『道元禪師とその

門流』所収）等参照。

- (7) 注(4)志部憲一氏論文他参照。なお『弁註』書誌等については、小坂機融氏「『正法眼蔵弁註』について」（『永平正法眼蔵菟書大成』一五「解題一」）に詳しい。

- (8) 岸沢惟安師論文「正法眼蔵聞解につきて」（『道元』昭和十一年九月所収）

- (9) 河村孝道氏のご教示に依る。

- (10) 『正法眼蔵註解全書』別巻「正法眼蔵註解全書内容書目解題」「七 正法眼蔵聞解」に、「面山師の口述を其の俣筆記せしものにて、俗語を以て平易に綴られあるが故に、初學者にも容易に了解せらるゝ無二の寶典なり、然れども意到句不到、句到意不到の失あり、婆説に過ぎ字句に拘泥するの嫌ひ無きにあらざれども、對機に應じて區々の會に於ける講説なれば、敢へて面師を咎むべきにあらず、寧ろ斧山侍者の勞を多とせざるべからず。」と言う。なお、書誌を含め『聞解』については、永久岳水師「斧山述吉蔵寺本『正法眼蔵聞解』」（『永平正法眼蔵菟書大成』十七「解題一」）参照。

- (11) 春秋社刊『道元禪師全集』一、二二四頁。なお『正法眼蔵』本文については、同書を『全集』と略記し所在を示す。

- (12) 『大成』一七、一〇七頁下。

- (13) 大正三四、八九三頁中。

- (14) 『大成』一五、一九四上。

- (15) 『大成』一八、五四七頁。

(16) 志部憲一氏論文「天桂伝尊再考」(『宗学研究』二六号所収)参照。なおこの点については後述する。

(17) 『全集』一、二二四頁。

(18) 『大成』一七、一〇七頁下。

(19) 大正二〇、一四〇頁上。

(20) 『大成』一五、一九四頁下。

(21) 『全集』一、二二四頁。

(22) 『大成』一七、二二四頁。

(23) 『大成』一五、一九四頁。

(24) 志部憲一氏論文「天桂伝尊の時間論」(『曹洞宗研究員研究紀要』二〇号所収)。

(25) 『全集』一、二二四頁。

(26) 『大成』一五、一九四上。

(27) 注(16)志部憲一氏論文参照。

(28) 『大成』一七、一〇七頁下。

(29) 大正三三、七四四頁下。

(30) 『法華経』「普門品」(大正九、五六頁下)に「若有無量百千萬億衆生受諸苦惱。聞是觀世音菩薩。一心稱名。觀世音菩薩即時觀其音聲皆得解脱。」とあるを踏まえる。

なお『観音玄義』(大正三四、八八一頁上)には、「及即時觀其音聲。觀即智。皆得解脱種種調伏衆生。八萬四千發心等。是利益即斷也。」とあり、この「觀」は「智徳」であり、「皆得解脱」の「断徳」に對することが指摘されており、単に衆生の音声を聞き届けるというのではなく、伝統的に、実相を觀ずる智である、と見られてきたことが確認

『正法眼蔵』「観音」近世末書の注釈態度(岩永)

される。

(31) 大正四六、一頁上。

(32) 大正四八、九八頁上中。

(33) 面山の「正法眼蔵品目述賛」(第十八 観音)(『大成』二〇、一〇七頁上)に、「述云。人人發般若光明。照見萬法無生者。名爲觀自在。所謂真觀清淨觀廣大智慧觀也。古徳商量。森然可見。」とあり、『聞解』がこの面山の語を祖述していることは明瞭であろう。

(34) 例えば面山の『宝慶記聞解』(『曹洞宗全書』「注解三」二一九頁)には、「坐蒲上に安住すると直に如来地に到りつく。…略…ここばかりが達磨大師正伝の坐禅と一枚。この三昧に安住すると自覚聖智を得る也。是が如来証上の禅なり。我界を少しもあらためずに、己に具ておる本性の智恵也。今日この自覚聖智を知て、永平正伝蒲団上にすわると、たれじゃと云ても如来禅でないものはない」とある。

(35) 拙稿「『正法眼蔵』「観音」について(その一)」『伝灯録』・『広灯録』の観音―(『曹洞宗研究員研究紀要』二七所収)に筆者の理解を述べておいた。

(36) 『永平正法眼蔵弁註調弦』(『大成』一五、九頁上)に、「已雲師編集後、蓋年将五百、未曾聞有^レ道此書、播揚於古仏大法。噫、甚哉。従上来亦吾門無其人乎。」と述べている。この自負については、鏡島元隆氏「道元禅師とその門流」(八二頁)参照。